

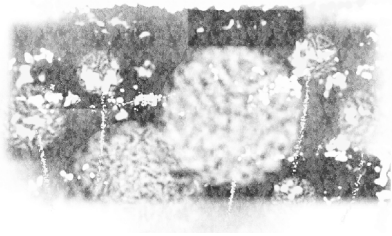
雪嶺集

〈宮坂静生鑑〉

顛末(3)

小林貴子

着膨れの芯を我とも蛻とも
夜を一つの優しさとして大地冬
蛙狩神事の蛙かく小さき
もう何も見たくなし只寝積みり
狼の穴も眼窩も暗きもの
ちりちりと冬の光に苛まれ
約束の叶はず清水治郎忌
恵方巻笛の如くに構へたり
月蝕の蝕は血の色春遠し
談判の如流水に詰め寄られ



縄文の海

佐藤映二

初糶や頸そろへ鷺小屋根の上
結氷のぴしと波止場よ無頼めく
海女小屋に銚子紬のストラップ
朽ち舟に飛砂容赦なし冬鷗
風除植ゑし夜は焼いわし香ばしき
細螺ながらみに酌み縄文の海どよむ

四季と折り合っ

佐藤映二

大峯あきら逝去のあとを追うかのように、金子兜太が他界した。文字通り二つの「巨星墜つ」である。虚子直系の伝統派俳人と現代俳句の旗手の二人の類いまれな対談が主宰の司会で実現し、俳句総合誌に収録されたのも記憶に新しい。お二人に関して、筆者の個人的な回想を書かせていただく。二〇一一年十月、大峯さんは第八句集『群生海』で詩歌文学館賞を受賞された。選考委員代表であった主宰の選評のあと挨拶に立たれた氏は、哲学者・浄土真宗のご住職らしい控

えめな話しぶり、花や鳥が自分たちについて語っている言葉聞き止め得て初めて俳句の言葉は生まれる、と話された。帰路の新幹線の車中でたまたまお会いでき、前日入手したばかりの本に署名してくださった。いまや形見がわりである。金子さんとは、機会をとらえて、氏の日銀福島支店時代に私の姉もたまたま在籍していたことをお伝えするや、すぐ思い出してくださり、当時の女子行員たちを自分の直感で付けたあだ名で呼んでおられたという。ちなみに、小柄で目の大きい姉のあだ名は、なんとホテルイカだった。